



4 ルネサンス雑考 中巻

A エラスムス雑録

B モンテーニュ雑録

C フランス・ルネサンスの人々

筑摩書房

渡辺一夫著作集 4



筑摩書房



渡辺一夫著作集4 ルネサンス雑考 中巻

一九七一年二月二十五日 初版第一刷発行
一九七七年三月十日 増補版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五一

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四一二三

印刷 株式会社精興社

製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七七

(分類)1398(製品)74804(出版社)4604

ルネサンス雑考 中巻 目次

端書	3
----	---

A エラスムス雑録（一九三六年—一九六八年）

貨狄尊者異聞	9
『痴愚神礼讃』を思い出して	13
エラスミスムについて	25
エラスムスに関する架空書簡（一・二）	40
『痴愚神礼讃』翻訳解説	61
デシデリウス・エラスムスとトマス・モーア	73

B モンテーニュ雑録（一九二九年—一九五八年）

モンテーニュとアンドレ・ジード	123
アンドレ・ジードのモンテーニュ論について	128
モンテーニュ素描——一九三三年の覚書——	135
モンテーニュ研究と時代	144

モンテーニュの体臭	154
モンテーニュと人喰人	158
『モンテーニュ旅日記』	170
善い野蛮人の話	173

C フランス・ルネサンスの人々（一九四六年—一九六四年）

序章	191
一 ある古典学者の話（ギヨーム・ビュデの場合）	203
二 ある外科医の話（アンブロワーズ・パレの場合）	229
三 ある陶工の話（ベルナール・パリッシーの場合）	246
四 ある宰相の話（ミシエル・ド・ロピタルの場合）	265
五 ある占星師の話（ノストラダムスの場合）	279
六 ある出版屋の話（エチエンヌ・ドレの場合）	296
七 ある東洋学者の話（ギヨーム・ボステルの場合）	317
八 ある王公の話（アンリ四世の場合）	328
九 ある神学者の話（ a ）（ミシエル・セルヴェの場合）	343
十 ある教祖の話（ a ）（ジャン・カルヴァンの場合）	362

十一	ある教祖の話（ b ）（イグナチウス・デ・ロヨラの場合）	406
----	-------------------------------------	-----

十二	ある神学者の話（ b ）（セバスチヤン・カステリヨンの場合）	435
----	---------------------------------------	-----

索引		巻末 I
----	-------	------

ルネサンス雑考 中巻

端書

本『ルネサンス雑考』中巻では、一九三六年から一九六八年までの間に、デシデリウス・エラスムスに関して書き綴った感想的雑録を、A「エラスムス雑録」という章名のもとにまとめた。私は、ラテン語に通じていないのであるから、エラスムスの著作はすべてフランス語訳されたものだけしか読んでいない。嘗て『痴愚神礼讃』をフランス語訳から翻訳したのは、他日ラテン語に明るい方が、この世界的名著をラテン語原文から、——丁度、南山大学の沢田昭夫教授が、トマス・モアの『ユートピア』をラテン語原典から翻訳されたように、——翻訳される幸福な日がくるまでの中継役にでもと思ったにすぎないのである。私の知る限り、明治時代以来、度々日本語訳されていた『ユートピア』が、そのラテン語原典から初めて沢田教授によって訳出されたのは、ようやく昨年（昭和四十四年、一九六九年）になってのことなのであるから、（中央公論社刊、「世界の名著」中に収録）モアよりも日本とは縁の薄いエラスムスの『痴愚神礼讃』のラテン語原典からの日本訳が生れるのは、まだ年数が必要かもしれない。しかし、東京大学の二宮敬助教授が、既にエラスムスの『対話集』をラテン語原典から抄訳して居られるから、（中央公論社刊、「世界の名著」中に収録）案外近いうちに、私の年来の夢もかなうようになるかもしれない。

私は、エラスムスの神学的造詣についても、その宗教思想についても、極めて雑駁な智識しか身につけていない。私は、ただ、エラスムスが、その時代の思想的混乱にどう対処したかという甚だ世俗的なことにのみ関心を抱き、

それを僅かばかり調べてみたにすぎないのである。従って、私のエラスムス観は、かなり偏向しているに相違ないと思う。しかし、私としては、徳川時代から「エラスムスの木像」が日本に伝来しているのに、(本巻収載の「貨狄尊者異聞」などを参照)エラスムスがいかなる人物であるかがあまり明らかにされず、戦前池田薫氏の『痴愚神札讀』の本邦初訳が公にされた時でも、訳者池田氏の悲願は必ずしも理解されなかったように思っていたので、たとえ私の理解が偏頗だという非難を受けても、せめてヨーロッパにおけるエラスムスの不朽の名声の何十分の一でもよいから、日本へ紹介したいと考えて、全く分を弁えずに数々の拙い雑文を書いてしまったのである。もし私が学者だったら、こうした雑文類は綴れなかったろう。しかも、杉田玄白のように、「翁の如き素意大略の人なれば……」と眩く自信すら持てる筈もない。私は、恐らくエラスムスについては、二度と筆を取ることはないだろう。

B 「モンテーニュ雑録」には、一九二九年から一九五八年にいたるまでの間に、モンテーニュについて求められるがままに書き散じた雑文が収録してある。いずれの雑録も、私の貧しい読書記録とはなり得ても、正式にモンテーニュ研究をして居られる方々には噴飯ものばかりではないかと思っている。日本におけるモンテーニュ研究家としては、先輩関根秀雄先生も居られる上に、原二郎氏荒木昭太郎氏のごとき新進の方々も輩出して居られるのであるから、また、この三氏の『エッセー』の翻訳も既に公表されているのであるから、私は、モンテーニュについても、二度と雑文を書くことはあるまい。

C 「フランス・ルネサンスの人々」は、既に単行本として存在していたものを、再編輯して再録した。この章に収められた十二人の人物だけが重大なわけではないのだが、フランソワ・ラブレの翻訳の下準備として調査して置かねばならぬ多くの人々のうち、今日まで、この十二人しか取り扱えなかったにすぎないのである。しかも、ある視角だけからしか見られなかったという欠点は、いずれの人物についての雑文にも見られる筈である。また、本式に取り組んだら、一人の人物を相手に、五年十年或は一生涯を費さねばならぬ場合もあり得ることを思えば、僅

か一九四六年から一九五七年までの十年強の間に、十二人もの人物を取り扱った私は、単なるボリグラフ雑文家にすぎないことを悟る。

この十二人に関する拙い紹介のみならず、エラスムスとモンテーニュとに関する雑録にしてみても、皆ラブレールを何とか読めるように、またそれを何とか翻訳できるようにするための下準備であったことは確かであり、これらの人物について若干調査したことは、しなかった場合よりも、私にとってよかったに相違ない。しかし、それならば、覚書のまま秘めて置くべきであり、軽々しく雑文の種にすべきではなかったろう。その点いくら咎められても、私は弁解できない。

本巻中の雑録は、**A・B・C**の章分けは別として、各章において、執筆年代順に配列してある。なお、**C**「フランス・ルネサンスの人々」の既刊単行本には、「略年表」が附けてあったが、本巻では、これを省き、本『著作集』中の『ルネサンス雑考』下巻末に添えられる「略年表」中に編入することにした。

一九七〇年三月

渡辺 一夫 識

A

エラスムス雑録（一九三六年—一九六八年）

貨狄尊者異聞

ステファン・ツワイクの『エラスムス』の仏訳を遅蒔きながら読んだ。このロッテルダムの賢者の態度からは、今更深い感銘を受けたが、それと同時にこれだけでよいのかという懸念も感じたので、仏訳が出た当時（一九三五年）のフランス評論界の本書に対する批判を一応試みに調べてみたら、流石に急迫した時代を反映して、エラスムス生ぬるしの論でほとんど一色に塗られていた。

ユマニスムの先達として狂信と錯乱と暴力とを地上から芟除して玲瓏たる知性の君臨を招致せんとした夢想家は、エラスムスは、旧教の牙城ローマにも新教の大本營ウィッテンベルクにも遂に膝を屈しなかった。カウフマンはこう言った。「余はロッテルダムのエラスムスが此の党派に属するや否やを知らんと求めしに、人ありて曰く『エラスムスは『HOMO PRO SE なり』と。』このエラスムスは、思想の相剋が流血を見ずにはやまぬ時代にあつて、他の何人もなし得なかった中立嚴守を保ち通しはした。しかし、何故に彼は、ヨーロッパ文化の重大転機となり得たウォルムスの国会（一五二一年）にもアウグスブルクの国会（一五三〇年）にも、再三の勸進に従わず、出席しなかったのか？ 信ずる善を勝たしめるためには、一世の信望を身に集めた彼の出席は不可欠ではなかったか？ 卑怯な偷安の故ではないか？ また、彼の愛弟子であり、一世の諷刺詩人と讃えられていた新教派の闘士ウルリッヒ・フォン・フッテンが病苦の身を運んでバーゼルなる彼の門を叩き、迫害の手より救えと乞うた時に、エラスム

スは何故に鉄扉を固く閉ざし、フッテンの憤死を外にして冷然と思案し続け得たのであるか？「真理を識らばそのために戦え！」「エラスムスは硝子器を聯べたる間を跳躍して、しかもこれを破碎せざらんことを願ひ、卵を敷き詰めたる上を歩みてなおこれを踏み潰さざらんことを求むる痴者なり！」とルッターに叱咤嘲罵された彼には、ソクラテスの毅然たる態度とは相容れぬエゴイスムがあるだけではないか？瘡を細ったユマニスト、エラスムスの道は肥えたブウルジョワのゲーテに通じはせぬか？従つて、こうしたエゴイスムがユマニスムの限度である以上、我々はエラスムスにもユマニスムにも何ら仰ぐべきものを持たぬ、というのが非難の主旨であつた。

これはエラスムス自身にとって正に手痛い非難であつて、彼の讚美者であるツワイク自身もこれを認めてはいる。しかし、エラスムスもユマニスムも、そのために抹殺されないように思う。この精神は、人類の良心として、泰平の光明のなかには現れずとも、乱世の嵐のなかでは、消えなるとする燈火のごとくではあるが、必ず現れ出るものではあるまいか？キリストがペローナの神に雇われたりすることに矛盾を感じたヨーロッパ人の心には、この良心の油は必ず滲潤して聖なる燈火が点ぜられるであらう。

ユマニスムは確かにルッターやカルヴァンを産んだ。しかし、ユマニスムの限界はその間に樹てられる。そして、ユマニスムは、ルッターやカルヴァンによつて発展せしめられた変革運動の破壊力とローマやソルボンヌ神学部 of 圧力との間に挟まれて、常に現実的には弱小な中立的存在となるべき運命を持っていた。しかし、あの時代にこの弱小な存在くらい困難なまた損なものはなかったことも事実である。名誉にも地位にも見棄られ、嘲罵と忘却と死と、恐らく実現不可能な理想だけが、その伴侶であつたのである。しかも、エラスムスは能くこれに耐えた。

晩年のエラスムスは、新旧兩派の執拗な誘いを拒絶し通したために、兩派から打ち棄てられるにいたつた。身に

覚えのない噂を立てられても、書簡を偽造されても、転ぶことを強いられても、彼は頑固にその道を歩いた。ここには儼安以上のものがある。ルーヴァンの町からは新教運動の煽動者として旧教派の学生たちに追われたし、住み馴れたバーゼルからは旧教派の走狗として駆逐された。フリブールの町に辿り著いたエラスムスは、明らかに彼のユマニスムの無力さを確認せざるを得なくなっていた。そして彼は、ベルカン、フィッシャー、トマス・モーアの刑死の報知を聞いて寧ろ羨望しながら終焉の地となるべきバーゼルの地をさして逃れ帰らねばならなかったのである。彼には「地上に棲家がなかった」のである。ユマニスムの弱小な生々しい姿がここにある。

しかしエラスムスは、不運な晩年のエラスムスに「師なかりせば余はあらざりき」と感謝の書簡を送ったラブレーにも、またモンテーニュにも、既に発芽している。対立抗争する党派の狂信と暴力とを飽くまでも否定し通すところにこの精神は生きるからである。ジードは嘗てこう記していた。「私はモリス・パレースに『議会で一番苦しいのは何か？』と訊ねた。パレースは、『自分の所属する党派とともに投票することだ』と答えたが、この言葉は耳朶に残っている」と。自説のために一切を歪曲しているとジードに咎められ続けたパレースにも、この苦悶はあったのである。この場合、裏切りと怯懦とは棄権のなかばかりに在るのではなくして、寧ろ採択のなかにも存するというエラスムスの命題がパレースの良心を撃ったからであろう。

エラスムス、ユマニスムはその本質として、その弱小存在を混乱期にのみ感ぜられ、しかも容易に抹殺されるものでもある。これはユマニスムの悲劇ではなくして、人類の悲劇である。ユマニスムは、様々な怪物と戦いながら今後も幾世紀を送らねばならぬか判らないし、恐らく、その勝利は「最後の審判」の時に甫めて起る人類の痛悔の声によってのみしか具現されないかもしれないほど、夢想中の夢想であるかもしれない。良心は、悪を犯し